

## Redundancy による英文読解指導（高校生を対象に）

### The Effects of Redundant Reading Input on High School Students' Reading Comprehension

奥村信彦

OKUMURA Nobuhiko

#### I. はじめに

本稿では L 2 読解力習得の過程にある学習者を皮相的な読みから思考を伴う読みへと導くには redundancy（余剰性）に富む reading input が特に必要であるとの認識に基づく指導を提案する。

言語に含まれる余剰性は、言語構造のなかに組み込まれている場合と、言語使用者が場面に応じて意識的に付加する場合とに分けて考えることができる<sup>1</sup>。は Goodman (1971) が言う、優れた読み手が sampling を行う際に頼りとする、言語自体が持つ余剰性のことであるが、渡辺 (1995) が指摘する余剰性は、単語、句から文レベル、さらにテキストレベルへと広がりをもつものである。

奥村 (1998) は、この余剰性に注目し、日本人高校生を対象に以下の実験を試みた。一定期間内に、統制群には教科書本文のみを文法訳読式授業により丹念に読ませ、実験群には教科書本文の他に同じ題材を扱いながら違った発想や観点から書かれた、あるいは題材に関連したテキスト (redundant reading input) をタスクを与えながら複数読ませ、いずれのほうか「深め読みの学力」(渡辺他, 1997)、すなわち思考を伴う読みの力を高めるのに効果があるか、を検証した。

結果は、pre-test においても post-test においても両群の間に統計的に有意な差はみられなかった。実験群は関連する複数のテキストを読むことによって、題材について様々な角度から考えることを助長され、統制群より内容を深く読みとる力を示すことが予想されたが、そこまでには至らなかったことになる。しかし、これは同時にこの指導がマイナスにはならなかったことを意味している。実験群の生徒は統制群の生徒に比べ約 2 倍半の量の英文を読み、その分だけ教科書本文の和訳や文法の詳細な説明は受けなかったが、そのことによって大きく不利益を被ったということはなかったのである。

本稿では、実験群に与えたタスクならびにタスクへの被験者の解答、さらに実験後の被験者の感想に焦点をあて、なぜ実験群での指導がマイナスにはならなかったのか、また「深め読みの学力」を養う上でこのような指導は有効なものとなりうるのか、考察を試みる。

#### II. 指導の具体例

##### A. 実験群と統制群の授業内容

扱った教材は UNICORN ENGLISH READING (文英堂, 1994) の Lesson 1 LOVE IS GIVING

UNTIL IT HURTS および For Listening: What Is Beautiful? である。いずれも Mother Teresa に関する教材で、For Listening: What Is Beautiful? は彼女が来日したときに行った講演の一部である。授業に要した時間は、Lesson 1 に 7 時間、For Listening に 1 時間である。

## 1. Lesson 1 の授業内容の比較

### (1) 共通点

概要をとらえさせるためにハンドアウトにより英語での QA を行った。質問は fact-finding questions が中心であるが、inferential questions も含まれている。

### (2) 相違点

統制群に対しては英文和訳を中心に、新出語・文法事項についてもできるだけ丁寧に説明を施した。実験群に対しては和訳・文法事項の解説は必要最小限にとどめ、本文を読み終えた時点で、以下に示すテキストを “Let’s read more about Mother Teresa” というタイトルで No. 1 から No. 4 まで与えた。

- No. 1 *Mother Teresa* (桐原書店 1982) より 1. Mother Teresa’s First Step および 3. These People Are Still Alive の 2 章。
- No. 2 *With Great Love* (山口書店 1983) より 9. HOSTILITY および 11. LOVE GROWS の 2 章。
- No. 3 TIME, SEPTEMBER 15, 1997 より SEEKER of SOULS の前半部分。
- No. 4 *WORDS TO REMEMBER* (桐原書店 1994) より 7. Mother Teresa , This Gift of Peace の一部。

No. 1 と No. 2 はサイドリーダーからの抜粋である。No. 3 が語彙の点で最も難易度が高く、若干の注を与えた。No. 4 は Mother Teresa のノーベル平和賞受賞スピーチからの抜粋であり、注が施されている。いずれのテキストも教科書と同じ題材を扱いながら異なった発想や観点から書かれた、あるいは題材に関連したテキストである。生徒には、タスクに取り組みながら読み進むこと、また辞書使用は最小限に留めるよう指示した。各テキストのタスクの概要は以下の通りである。

- No. 1 テキストを読み、気に入った一文を抜きださせる。
- No. 2 テキストが教科書の本文のどの部分を詳しく描いたものか選択肢から指摘させ、挿入されている 4 つのエピソードを日本語で要約させる。
- No. 3 テキストに沿って日本語による QA。質問数 6 個。
- No. 4 テキストに沿って日本語による QA。質問数 3 個。

## 2. For Listening の授業内容の比較

扱い方には両群の間に差はなく、講演のテープを聴かせながら文字を追わせ、必要に応じ途中中断しては内容を日本語で問いながら概要を確認した。

### B. 実験群の授業内容の具体例

ここでは、“Let’s read more about Mother Teresa.” の No. 1 と No. 3 に焦点をあてる。

#### 1. “Let’s read more about Mother Teresa.” No. 1

テキストを読み、自分が気に入った箇所を抜き出すようにという指示に対し、40名中21名が挙げたのが次の下線部 (1) である。(英文は抜粋。下線部筆者。以下同じ。)

Mother Teresa insisted that all the wounds had to be treated and that that all the people had to be helped until they died. Someone asked her, “Why do you help them? Can’t you see that they’re already dying?” Mother Teresa answered, “No, I must help them. They’re still alive.”

Mother Teresa felt that the people must also be given warmth. She held their hands tightly, she smoothed their backs when they were in pain and she looked deeply into their eyes and smiled quietly. One man told Mother Teresa before he died, “(1) I lived like an animal in the streets but now, in your building, I can die like an angel.”

これを教科書本文と比較してみたい。

Not all of the dying actually die. About half of them live and are cared for, or may even get well enough to find jobs and become independent. Many thousands of people have passed through that first home for the sick and dying. (2) Those who die, die peacefully, without fear. For, to Mother Teresa, “Death is going home. If it was properly explained that death was nothing but going home to God, then there would be no fear.”

おそらく生徒たちは下線部 (2) を読んだだけでは感じることはできない衝撃を下線部 (1) から受けたのである。これを、標準的な日本人英語教師が余剰性をもって解説しようとしても、“Those who die, die happily. They are not afraid of dying.” といった程度に終わってしまうであろう。もちろんこれでも生徒の理解を深めることは可能である。しかし、下線部 (1) が与える衝撃には到底及ばない。もし、与えたテキストに、“Those who die, die happily. They are not afraid of dying.” としか書かれていなかったならば、半数もの生徒が気に入った箇所としてこれを抜き出すか疑わしい。

ここで注目すべきことは下線部 (1) の authenticity の問題である。下線部 (2) は artificial との感を否めないが、下線部 (1) はいかにも authentic である。喜びを満面に湛えて死にゆく美しいその姿を読者に自然と思い浮かべさせる (visualize させる) 力をもっている。これが生徒の心を打ったと言ってよい。これは余剰性の質の問題である。

## 2. “Let’s read more about Mother Teresa” No. 3

テキストに沿って日本語による質問を6つ与えた。そのうちの最初の4問と生徒の反応を紹介する。

- (1) 「教科書では the poorest of the poor という表現が何回か登場しますが、ここでは同じ人々のことをどのように表現していますか。英語の表現をそのまま抜き出さない。」

大半の生徒は the lowest of the low と答えた。単に貧しいというだけではなく、かつてカースト制度が存在したインドにあってその最下層の人々という認識は新たな角度から生徒の理解を深めたにちがいない。最上級を用いた表現形式が同じであることがさらに大きなインパクトを与えたものと思われる。他に挙げられていた表現は the abandoned and the sick と souls in search of final blessing である。これらの redundant な表現は極貧という言葉だけでは到底伝えることのできない情報と深い憂いを生徒に与えたことであろう。

- (2) 「自分たちが social workers と呼ばれることを Mother Teresa はどう感じていますか。肯定していますか。」

生徒はテキストの “We are not (social workers).” という Mother Teresa の言葉から「否定している。」と答え、その理由として、そこに続く “We serve Jesus. I serve Jesus 24 hours a day.” という言葉を根拠に挙げている。これは実に明解で、教科書本文の抽象的な記述を一瞬にして具体性に満ちたものにする。たとえば教科書本文の一節はこうである。

I believe in person to person; every person is Christ for me, and since there is only one Jesus, that person is the only person in the world for me at that moment.

和訳しても何か釈然としないこの文が、“I serve Jesus 24 hours a day.” という表現により、納得のゆくものとなる。Mother Teresa にとって人はだれしも Jesus であり、彼(彼女)に仕えるのに営業時間などないのである。

- (3) 「Mother Teresa は自分のことを神の何のようだと述べていますか。」

大半の生徒が、テキスト中の Mother Teresa の言葉 “I am like a little pencil in [God’s] hand. He does the thinking. He does the writing. The pencil has only to be allowed to be used.” を和訳した。適切な比喩は具体的イメージを読者に与え理解を助けるが、これはまさにその例である。教科書本文で Mother Teresa が神の啓示を受ける場面がある。

But , one day in 1946, when she was traveling on a train, she heard a clear call from God to give up everything and follow him into the streets to serve him among the poorest of the poor.

この to serve him [God] among the poorest of the poor という表現は生徒にとっては理解しにくい

と思われるが、上記の一節は「神に仕える」とはどういうことか、鮮明なイメージを与えてくれる。

- (3) 「Mother Teresa を慕い集まってきた弟子たちと彼女がまず味わったのはどのようなものでしたか。順風満帆に事は進みましたか。」

教科書本文には次の記述がある。

She had no money except those few coins, no food except what she was given. But soon some of the girls she had taught came to help her, and so the work began to grow.

これだけでは、Mother Teresa と彼女に共感し生活を共にするようになった教え子たちがそれまでの生活のすべて（物質的な面ばかりではなく）をなげうち、いかに極貧の生活に堪えていたか、想像するのに無理がある。しかし、これを実感できないと、この課のタイトル 'LOVE IS GIVING UNTIL IT HURTS' を理解することは難しい。自分に必要なものを確保した上で余りあるものを他人に与えるのでは 'UNTIL IT HURTS' とはならないことが理解できない。与えたテキストには次の一節がある。

The nuns crept along the harsh streets of Calcutta in search of mankind's most miserable; the sisters had to beg for their own support, even their daily meals. "There were times during the first three or four months," says Teresa's biographer Navin Chawla, "when she would be humiliated, and tears would be streaming down her cheeks. [She] told herself, 'I'll teach myself to beg, no matter how much abuse and humiliation I have to endure.'"

設問に対し、多くの生徒がこの部分に言及し「順調には進まなかった。」と答えた。『愛する』ことに伴う『いたみ』とは何か、多少なりとも理解できたはずである。

### III. 終わりに

実験終了後、生徒に感想を書かせた。英語と日本語両方で書くこと、しかしそれらは必ずしも同じ内容である必要はないこととした。いずれの言語であっても表現しやすいほうで正直な感想を引き出すことを意図したものである。2名の感想をここに紹介したい。

生徒 A

As we read many compositions about Mother Teresa, I couldn't become judging what I had got my knowledge by reading textbook. I read my textbook again. (1) I realized that it was good for me to read many compositions and reports written about Mother Teresa. What our textbook is written was too little.

I moved that Mother Teresa helped the poorest of the poor through her life. I respect her selfless love and great kindness. My knowledge about Mother Teresa will

not make me forget that there are the poorest of the poor in the whole world.

最近のナイフをふりまわす中学生やいじめを起こす生徒等も、マザー・テレサの言う「西洋の愛の足りない人々」の一部なのかもしれない、と思った。ヒンドゥー教の貧しい家族のお母さんのこと、「今までは動物のようだった」と言った男性、「ありがとう」と言って死んでいった女性 etc...のエピソードは教科書には Listening のところでしか触れていなかったけど、これらのエピソードを知ることができ、マザー・テレサの功績をより深く知ることができて本当によかった。(2) 少し大げさかもしれないけれど、もしマザー・テレサについて名前しか知らないままだったら、私はゆくゆく大きな過ちをおかしかなかっただろう、と思うくらい、私は何枚ものプリントを読むごとに感動した。

生徒 B

Teresa's patient said, "I lived like an animal in the streets but now, in your building, I can die like an angel." (3) When I read this in my home. Really tears were running down my cheeks. This thing hurt my heart. And I surprised. Such a thing must not be continued forever. I want to think that we should know better this thing, and we should do whatever we can do. (4) I want to learn Teresa more.

すごい一言で言ってしまったらいけないと思いますが、本当にそう思いました。まだ12才とか幼いときに貧しい人を救ってあげたいと思うなんて、思うことはあるかもしれないけれど実際行動は出来ないと思います。ノーベル賞の賞金も確か貧しい人々の為にさげたと聞きました。(5) 今インドでは核実験をやったけれどそんなところにお金を使っているなら、テレサの様な人達にどんどん援助を送るべきだと思います。私もいつかこんなすばらしい人になりたいです。

生徒の書いたままなので、間違いや表現の拙さはあるが、まず、教科書本文だけでは経験することのできない深い感動を得た様子がよく表現されていることがわかる(下線部(2)(3))。

さらに、教科書本文だけでは情報があまりに少なく(下線部(1))、もっと読みたい、知識を得たいと感じ(下線部(4))、読みとった内容から自然に自分の意見を発展させている(Expansion)(下線部(5))ことがわかる。これはまさに皮相的な読みから思考を伴う読みへの転換と言ってよい。奥村(1998)の実験群での指導がマイナスにはならなかったのは、被験者が redundant reading input を与えられることによって、思考を伴う読みのプロセスをたどることを助長されたからと考えられる。「深め読みの学力」を養う上でこのような指導が有効なものとなりうる可能性は十分にある。

奥村(1998)の指摘する今後の課題、与える redundant reading input の量はどの程度が望ましいか、こうした指導を継続していった場合、学習者の読解力にどのような変化がみられるか、に、redundant reading input の質の検討、も加えたい。

(長野県・屋代高等学校)

注

奥村 信彦. (2000). 「Redundancy による英文読解指導（高校生を対象に）」. 『コミュニケーションと言語教育 (SURCLE) 第2号』, 45-51.

(1) 新英語学辞典（研究社, 1982）による。

引用文献

Goodman, K. S. (1971). Psycholinguistic universals in the reading process. In P. Pimsleur & T. Quinn (Eds.), *The psychology of second language learning*. (pp. 135-142) Cambridge: Cambridge University Press.

奥村信彦. (1998). 「Redundancy による英文読解指導の試み」『中部地区英語教育学会紀要』第 28 号, 97-102.

渡辺時夫. (1995). 「The Input Hypothesis（インプット理論）：MERRIER Approach のすすめ」

田崎清忠・佐野富士子（編）『現代英語教授法総覧』（pp. 181-196）. 東京：大修館書店.

渡辺時夫・野澤重典・酒井英樹. (1997). 「MERRIER Approach のすすめ テキストの深め読みに焦点をあてて」『英語教育』9月号, 32-33. 東京：大修館書店.